

は し が き

青 野 壽 郎

立正大学人文科学研究所年報は、昭和44年度をもって第8号を数えることになった。本研究所の創立は、昭和35年であるから既に満10年の歳月が過ぎ去ったことになり、現在は11年目が進行しているわけである。創設当初は予算面において、はなはだ微力な存在であるにすぎなかったが、初代所長田中啓爾教授・2代目所長伊木寿一教授を中心とする所員一同の努力が積み重なって、予算もしだいに増額され、それに伴って所員の研究活動が活発化し、現在は、ようやくわが国の私立大学における研究所としての態様がやや整備されるにいたった。

大学の国家社会に対する使命が、教育と研究との両面にあることはいうまでもないところで、本研究所はもちろん本学文学部における研究面の一端を分担するものである。本研究所の順調な発展は、立正大学文学部およびそれを包含する立正大学の正常な発展に随伴するものであることは自明の理である。わが国の私立大学の多くは、今や財政面において危機に際会しているといわれているが、個々の大学自体だけでなく、国家社会としても、この事態を積極的に解決すべき責務があろう。私は本大学が、この危機を乗り越えて健全に発展するよう強く期待するものである。

本年報の第4号から研究費の配布を受けられた所員の論文を、字数の制限はありながらもフルペーパーで掲載し、年報の学術的価値をいっそう高めるように改めたが、第8号もこの方針を踏襲することにした。昭和44年度も前年同様に所員の口頭による研究発表を、「研究所日記」でみられるように定期的の実施し、専門分野を異にする所員の研究業績を理解することを通じて、所員各自の研究の深化に寄与しようとした。原稿を寄せられたり、研究成果を講演された所員のご努力に敬意を表したい。

本研究所の運営は、もちろん所長や幹事会の専断によるものであってはならない。所長や幹事は所員の総意に基づいて本研究所の健全な発展のため努力したつもりであるが、さらに多くの建設的なご意見を寄せられるように、切にお願いするしだいである。

昭和45年7月9日